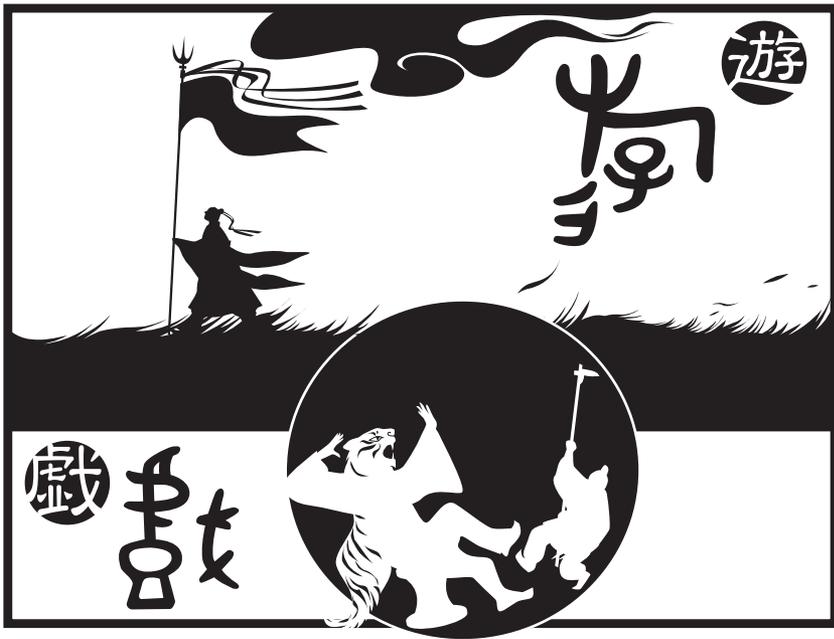


白川静のことば
《9》



金子都美絵・画

遊戯には、闘争という要素があるとされている。
〔中略〕

古代の遊行する神も、内にたいする保護霊としての機能は、同時に外にたいする闘争的な力として発動するわけであるから、その意味で戦争は、遊戯的性格をもつということがいえそうである。

火あそびということばは、『広辞苑』に「危険な遊び。特に無分別なその場限りの情事」とあるが、彪大な原子力兵器を擁する大国のいまのありかたは、まさに火遊び的な遊戯である。

戦争と遊戯とは、あまりにもかけはなれたものと思われるかも知れないが、遊とはその氏族神を擁して、外に行動することであった。また戯（戯）も、虎形のも物が腰かけている後から、戈ほこを加えてこれを伎ほこつ形で、もと軍舞・軍戯を意味する字であったようである。

『中国古代の文化』講談社学術文庫 p203～204)